
fatexx3 第三次聖杯戦争

度会

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a t e x x 3 第三次聖杯戦争

【Nコード】

N 3 9 5 1 Y

【作者名】

度会

【あらすじ】

f a t e / z e r oを見ていてなぜか第三次を妄想してしまいました。

p i x i vでも書いてます。一応。

プロローグ（前書き）

二次創作なんで、そういう風なものに嫌悪を感じる人はご遠慮下さい。

プロローグ

最初に断っておく。

この聖杯戦争において勝者はただの一人も存在しない。

「聖杯戦争——それは六十年おきに繰り返される七人のマスターと七人のサーヴァントの殺し合いである」

彼女たちは屋敷を出る前に先代に手渡された手紙の一文を思わず口に出して読んでいた。

「意味が分かりますか？ 姉さん」

「勿論あなたよりはね」

ふふ。

と彼女たちはお互いを見て笑った。

傍から見ている人間にはさぞ不思議な光景に見えることであろう。

彼女たちは笑いながらお互いを貶しあっているのだ。

もともとフィンランドのこの街に住む人間にとっては日常茶飯事の光景であり、誰も気にするものなど存在しないのだが。

『エーデルフェルトの双子姉妹』

仇名でもなく二人はそう言われていた。

双子と言われても方や姉は髪は茶色く緩めに巻いてあり、勝ち気そうな目が特徴的だった。

それでもう片方の妹はというと、色素は薄く、目も少し眠たそうに目じりが下がっていた。

姉に言わせると『神様はどちらが優勢な遺伝子を受け継いでいるのか理解していたから私の方が素晴らしく生まれてきたのよ』ということらしかった。

妹はそんな姉を見ても、ただの頭の可哀想な人と憐憫の眼差しを向けるだけであった。

そんな彼女たちなのだが、肩書きはエーデルフェルト家の当主なのである。

二人も当主がいる。

その事実、エーデルフェルト家は二人でようやく一人前の存在なのだと他の魔術師は陰で揶揄していることを彼女たちは知っていた。

そしてその噂を聞いたたびに彼女たちは笑うのであった。

「そういえば、姉さん。この間また私たちが半人前だから当主を二人立てるしかなかったと噂されているのを聞いてしまいましたわ」

「あら、その方は可哀想なお方ですね」

彼女たちはまた顔を見合わせて笑った。

エーデルフェルト家が二人も当主を立てたのはそんなちっぽけな理由などではなかったのだ。

この二人は仲が悪かったのだ。

いや、仲が悪いという言葉を彼女たちに当てはめるのは無粋といえよう。

例によって先代、つまり二人の父親が当主をどちらかに決めようとする決めてどちらかが不平を言い出す。

口だけなら可愛いものだが、彼女たちは実力行使に出るのだ。

このままでは、内紛でエーデルフェルト家が崩壊してしまう。

そう危惧した先代がようやくなく二人に当主の座を与えてとりあえず二人を立てたのだった。

「ねえ、姉さん」

「なに？妹？」

「私ね、聖杯が欲しいわ」

「あら、奇遇。珍しく意見があったわね」

「姉さんもなんですか？ やっぱり双子ですね。気が合います。では、一時休戦ということだ」

どちらも微笑みを崩さない。

「妹。それは名案ね」

それじゃ、と姉は小指を差し出す。

妹も意図を理解したのか小指を組む。

「なんだか私達仲良い姉妹みたいですね」

そうね。と姉は答えると二人してフィンランドを旅立つ。

聖杯を得るために。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

反響あってもなくてもがんばります。

プロローグ？

――半年前

彼女は冬木市にいた。

と言ってもどこからか越してきたわけではない。

ただ帰って来たのだ。

この忌まわしき土地に。

彼女はポケットから一枚の写真を取り出して少し微笑んだ。

そこに映る少女は彼女の妹だった。

ここに戻ってくる前に母方の家に預けてきたのだ。

大切だから。

もし自分になにかあっても無事に育って欲しいから。

妹への情は置いてきたはずの彼女だが、写真を見ると、幾分か気持ち
ちが落ち着いた。

彼女は数年前にここを出たきり久々の帰郷となるわけだが、街並み
が変わっていないことに驚いてい
る。

そして、彼女は自らの生家辿りつく。

「この家は変わらないな……」

自然とそんな言葉が口をつく。

街並みよりも変わっていない。

まるでここだけ時間が止まっているようだ。

いつまでも妄執に取り付かれた家。

彼女は自分の家、屋敷に対してそう悪態を吐くと扉に手をかけた。

ガチャリと古めかしい音を立てて扉が開く。

屋敷の中にいた家政婦の何名かは彼女の姿に気づき声をかけようとしたが、彼女はそれを意に介さず目的の部屋へと歩を進める。

流石は勝手知ったる自らの家。

迷うことなく目的の部屋の前に着く。

その扉を開けようとした時体の中で何かが動くのを感じた。

久しぶりの感覚だ。

自分の中で得体のしれない何かが動いている。

そんな懐かしの感覚に苦笑しながら彼女は扉を開け放った。

部屋の中は電気は愚か光がどこからも入らない文字通り暗闇に包まれていた。

「久しぶりだな。臓硯」

彼女が暗闇に向かってそう叫ぶと暗闇がその声に反応するように動く。

「久しぶりじゃの。巳苑^{ミツノ}」

彼女、巳苑は臓硯の声を聞くと嫌悪感をあらわにした。

「どういう風の吹きまわしかの？ てっきり貴様は死んだと思っていたのにの」

カラカラと笑いながら一人の老人が姿を現した。

齢いくつになるだろうか。

巳苑には見当もつかない。

ただ、一つだけ言えるのは、臓硯は私が生まれてからずっと老いても若返ってもいないことだけだった。

そして戸籍上の、あくまで戸籍上の巳苑の父親だ。

巳苑は黙って右手に宿った三画の紋章を臓硯に見せる。

臓硯は、そのその紋章を見ると、ニヤリと口を歪めた。

「なるほど……どおりで、あいつには宿らないはずだ」

「アイツ？」

巳苑は臓硯の言葉に眉ひそめた。

臓硯の話によると巳苑を見離して分家の魔術的素養が高い人間に徹底的に英才教育を施したそうだ。

勿論、学問などではなく、蟲に慣れるための訓練だ。

なるほど、確かに分家の人間ならば特に問題はないだろう。

要は適正の問題だ。

最初の御三家は聖杯戦争の参加資格を得ることが優先的に認められているのだが、全く選ばれる気配がなく不審に思っていたらしい。

「それで、その人は？」

巳苑は大して興味を惹かれたわけでもなく、ただの話を書く進める為に適当に相槌を打つ。

「それが、蟲に食べさせてしまったわい」

カラカラカラと臓硯は笑った。

巳苑はその声、表情、態度など臓硯の全てが嫌いだった。

幼い頃から修行と称した徹底的な蟲の凌辱。

苦痛しか残らなかった。

幸いと言うのか不幸と言うのか予想以上のスピードで蟲との調整が終わった。

その事実が臓硯を喜ばせたのが腹立たしい。

しかし、おかげで今の自分があるというのも皮肉な話だった。

巳苑の力を持っても臓硯の蟲を全て殺すことは出来ない。

死んでるモノを殺せと言っているようなものであった。

今この屋敷を全て焼けば臓硯は死ぬだろうか？

巳苑の頭の中にふとそんな考えが浮かんだが、すぐにかぶりを振ってその考えを打ち消す。

だめだ。

その程度で何とかなるんだったら最初から魔術回路が宿った時点で殺している。

巳苑はそう心の中で毒づく。

腐っても魔術師。

いや腐っているから魔術師とでも言うべきか。

何度この体に流れるを血を恨んだことだろう。

まあ、いい。

それも今回で終わる。

「そういえば、あのいつも貴様の後ろについてきていた餓鬼が見えぬようじゃが？」

臓硯はそう言うと、私の後ろを見るような素振りを見せる。

餓鬼…か……。

コイツはきつと、妹の美鈴の名前なんて一度も聞いたことがないだろう。

魔術的素養がない人間はただの餌か。

「美鈴は……死んだ」

「嘘じゃな」

已苑の嘘を臓硯は即座に否定した。

そして、例の薄気味悪いカラカラと声を出して笑った。

「貴様が、あの餓鬼を見殺しにしておいてそこまで平然としてられるわけではあるまい。それに貴様の嘘を見破るなど造作もないことじゃ」

巳苑は臓硯に気づかれないように歯噛みする。

「臓硯。アンタの望みって不老不死だったか」

巳苑の問いに臓硯は左様。と答えた。

「人間一人の寿命だけでは根源の渦に至るには短すぎるのでは」

そう臆面もなく言い切る臓硯を巳苑はキッと見据える。

確かに昔は、遠い昔、それこそ目の前にいるこの群体が人間であった頃の悲願はそうだったのかもしれない。

しかし、巳苑には今の臓硯にそんな望みは無いと考える。

死にたくない。

その妄執に取り憑く妖怪にしか見えなかった。

「私の望みはね……」

アンタを殺すことだよ、臓硯。

こいつさえいなくなれば、あの蟲達を使って何かをするということ、ひいては間桐の家から魔術という

モノから解放されるかもしれない。

そうすれば、美鈴をこんな目にあわせなくて済む。

「カカツ。中々不穏なことを考えていそうじゃの巳苑」

臓硯はそう言うのと、巳苑に背を向けた。

「貴様には、まだ利用価値がある。長旅で疲れたじやろう。どこかの部屋で休んでおれ」

そう言うって臓硯はまた暗闇に包まれた部屋の中に溶けていった。

巳苑は昔自分の使っていた部屋の扉を開けた。

そこは家を出ていった時と変わらぬままだった。

長年使っていたベッドに横たわる。

暫く使っていなかったせいか埃が舞った。

巳苑は趣ろに自らの手を天井に伸ばした。

「久々に出てきなよ蟲共」

巳苑の声が合図となったのか、挙げられた巳苑の腕の方に向かって何か巳苑の体の中を進んでいるかのように皮膚が盛り上がる。

そこから這い出た蟲は、大小様々でまた形状も一つ一つ変わってい

た。

ヴヴヴとうざったような羽音を立てる蟲もいれば、地面にベタリと貼りついたままの蟲もいる。

彼らは蟲であって虫ではない。

全て自然界に存在する昆虫とは遠くかけ離れた存在だ。

「この蟲共を体に入れて早二十年余り……そらこいつらも私を認めるわけだ」

元々、魔術の才能を色濃く受け継いでいた巳苑の体は蟲達にとってはまさに御馳走のようなものであり、いくら蟲に知能がないとはいえ、長年付き合えば共生という関係が生まれるのも自明の理である。

おかげで彼女が蟲を行使する際に感じる痛みや悪寒などはほぼ、存在しなかった。

蟲たちは私の言うことを理解してくれる数少ない生命体だ。

「もし……この蟲達を例えば一年やそこらで制御しようとするならば、それこそ地獄を見なきゃならんだろうね」

でも、そんな考えは杞憂か。

そう考えて巳苑は被りを振った。

「だってこの醜い聖杯戦争は、私の代で終わるんだからね。だから、他のマスターってのには悪いけど死んで貰う」

闘いに犠牲はつきものだ。

そうだよ。と妹の顔を思い出し、笑顔で虚空にそう問いかけると
已苑は規則正しい寝息を立て始めた。

プロローグ―? (前書き)

こんばんは。

見て下さってくれる方には損をさせないように頑張ります。

プロローグ？

――三か月前

イギリスのとある屋敷の中では軽快な鼻唄が聞こえていた。

その鼻唄の主は、上機嫌なのを隠すこともなく、すれ違う使用人達にも笑顔を振りまいていた。

鼻唄が似合うと言っては本人に失礼かもしれないが、鼻唄と着ている赤黒いドレスが良く似合っていた。

そして、その鼻唄の主は歩みを止める。

「あら、お姉さま、これからどこかへ行かれるのですか？」

お姉さまと呼ばれた女は感情を込めることなく、仕事と言い放った。

「私の所の仕事も、それから姉さんの所もこれから忙しくなるから、メールには構ってやれないのよ」

ごめんね。と姉は彼女、メールの頭を一撫でするとせわしく足早にその場を去った。

メールは姉達の仕事の詳しい内容を知ることが出来なかったが、恐らく軍需関係の仕事なのだろうと当たりをつけていた。

このご時世に忙しくなる職業など数えるほどしかないからだ。

メイルは機嫌のいい理由である自分の右手を見た。

そこには幾何学的に描かれた三画の模様が浮かんでいる。

それは即ち聖杯に選ばれたという証明に他ならなかった。

この令呪が刻まれたのは今朝のことで、何か鈍痛がすると思い手を出してみるとこの令呪が刻まれていたのだ。

「60年に一度行われるこの度の戦争。我が名門アメジスト家がいただくとするわ」

アメジスト家は5代続いた魔術の家系であり、父は時計塔に勤めていた経験を持つ魔術師会では名の知られた家系だった。

メイルの上には二人の姉がいるが、どちらも少しは魔術を嚙んだがやがて使い道を見いだせずにそれぞれ魔術師ではなく他の職業に就いていた。

この代で魔術師としての血は途絶えるのかと父親は危惧していたが、三女であるメイルは父親の才能を受け継いだのか魔術の才があった。

得意とする魔術は、『先読み』。中国武術などでは相手の呼吸を読んで次の一手を読むらしいが、メイルはそれを対魔術師に改良したものである。

メイルの眼は相手魔術師が魔術を使う瞬間に、相手の体のどこの部

位に魔力が集中しているのかを見定めることが出来た。

「幸いなことに、この聖杯戦争にぴったりのサーヴァントを呼ぶ触媒は揃ってるのよね」

メイルが上機嫌な理由は令呪を得ただけだからではなかった。

このアメジスト家にはメイルが生まれる前からこの家にある秘宝と呼ぶのにふさわしいものが存在していたのである。

そうまさに聖遺物と呼ぶのに相応しいシリアで見つかった秘宝をメイルは触媒として使用する腹積もりであつた。

「さて、それはそうと、冬木に行く準備をしなくちゃね。あれはどこかしら……」

メイルは意気揚々とスーツケースに荷物を積む。

作りモノの聖杯を持ちかえるために。

プロローグ―? (後書き)

何かあれば遠慮なくお願いします。

プロローグ―？

一カ月前

「どうにも、お前さんは神さまに愛されてるのかねえ」

「そんなことないよ、ばあさん。ただ単純に運でもあっただけさ」

寂れていると言っても差支えない村の中でそこまで大きくもない家の中で男と老婆が話をしていた。

老婆の方は細く力を込めてしまえば折れてしまいそうな位であった。

それに比べて男の方は日本男児にしては背が高くがっしりとした時代が時代なら武蔵坊弁慶に並ぶかと言うほどの巨軀だった。

男は、自分の荒れた指を眺める。

徴兵されてからというものの海に出ることはあっても魚を捕ったりすることは無くなってしまったな。と

自らが積み上げた経験が無に帰るような気持ちにして少し哀しくなった。

男は漁師だった。

父の背中を追って海に出た。

そして二十歳になる頃にはこの村周辺でもその名前を響かせるほど

の名手になっていた。

「もう俺が魚を捕ることはないのかもな」

目の前の老婆に聞こえることなく男は呟いた。

男は荒れた指から視線を自らの手の甲に移す。

そこにはいつ出来たか分からない傷があった。

擦っても取れないのだから刺青に近いものがある。

男の名前は権藤統二と言った。

彼は本来聖杯戦争とは全く無縁の人間であった。

恐らく彼は自分にこの刺青が宿るまで聖杯戦争のせの字も知らなかったことに違いない。

統二の背中には首から尻にかけて大きな刺青があった。

これは勿論統二自身が入れたものではない。

まるで人体の血管と神経を模したような模様。

その刺青に理由についてはこの村では伝説にもなっていた。

まだ、統二が、少年だった頃、と言ってももう船にも乗っていた時のある日のこと。

彼の乗っていた船が嵐に見舞われ難破した。

当然統二も投げ出されて、体は海深くに沈んでいった。

そろそろ息も持たなくなってきたここまでかと統二が人生を諦めた瞬間。

海の底に光る社を見つけた。

統二はその光が気になり、最後の力を振り絞ってその光に触れた。

目を覚ました統二が気づくと浜辺に打ち上げられていた。

しかし、立ち上がる気力すらなくただ倒れていた所を村人に一人が発見して偶然にも助かったのだった。

統二は持ち前の体力で暫く寝ると快復したのだが、背中に大きな傷が出来ており、その傷だけだいつま

でも色濃く残っていた。

それが現在の刺青なのだ。

統二がその話を村の長老達にすると、長老たちは口を合わせてこの村に古くから伝わる水神の加護だと言った。

加護を受けてからというもの、背中の刺青に精神を集中させると普段持つことが出来ないような重い物

を持ち上げたり、速く動くことが出来るようになった。

その力を行使する度に背中が熱くなるのを感じた。

そして、右手に謎の刺青が宿る前の晩奇妙な夢を見たのだ。

海の水神と名乗る昔話によく出てくる精霊のような風貌をした老人が統二の前に現れたのだ。

『お前はまもなく聖杯にマスターとして呼び出されるだろう。その時お前に授けた魔術回路がきつと役に立つだろう』

『お言葉ですが水神殿。聖杯戦争とはなんでしょうか……』

統二がそう質問すると老人はにこやかに笑い、統二はまた光に包まれる。

光に触れた瞬間統二は全てを理解していた。

聖杯戦争、マスター、サーヴァント、そして魔術師と呼ばれる存在がいること、そして己の体に宿った

背中中の刺青の意味を。

そして全てを理解した上で統二はその老人に向き直った。

『水神殿あなたは何を望むのですか？』

『そうさのお……またこの水神信仰を蘇らせて欲しいかの』

欲のない神様だ。統二は素直にそう思った。

恐らくその願いもこの神にとってどうでもいいようなことだろうという印象を受けた。

『承知しました。あなたに助けていただいたこの命あなたの為に使いましょう』

統二がそう言うと、急に目が覚めた。

夢だったのか。

それにしても随分とリアルな夢だった。

統二は寢床の横に古びた木片があるのに気がつく。

それを手に取ってみる。

統二の船に使われている材木ではなかった。

それにこの木片が俺が落としたものにしては、古すぎる。

その木片はほぼ崩れかかっているともすれば霧散してしまいそうだった。

ただ、この使い道もないゴミ同然の木片を何故か統二は捨てる事が出来なかった。

「もしかしたら、水神殿が私の為に触媒でも置いていてくれたの

かもしれないな」

統二は自分の夢のような妄想に少し笑みを漏らして、手ぬぐい
にその木片をそっと包むと、机の中にそ
っとしまった。

第三次聖杯戦争開幕

—360…00…00

「少しいいですか？神父？」

遠坂幹継は静かに聖堂教会の扉をノックした。

「もうそろそろ聖杯戦争が始まるのに中立的立場である監督役の下に訪れてよろしいんですか？」

今回聖堂教会に派遣された神父、言峰璃正はそう厳かに言う。

「別に知り合いの所に訪れて何が悪いのだろうか？」

そう言うのと、幹継は持ってきた自前のワインを璃正に向かって見せる。

その酒を見て、璃正はならば仕方がないな。と幹継を教会の中に招いた。

「他のマスターの情報はどうなっている？」

部屋に入って開口一番幹継はいきなり核心を尋ねた。

ふむ。璃正はこめかみ辺りをコンコンと叩く。

「今、申告されているマスターは一人。権藤統二だけです。どうやら彼は魔術師ではないそうですが」

璃正の言葉に幹継が噴き出す。

「まさか、この誉高き聖杯戦争という場において魔術師にもなれない一般人がなんと二人も。どうやら聖杯は遂にこの遠坂に跪くのか」

これは傑作だ。

幹継は上機嫌にワインを飲み干す。

「そうですか。私には魔術のことは理解しかねるのでそのようなことは分からないのですが。もう一人の方権藤統二という人間ですが……」

そこで璃正は言い籠った。

「どうかしたのか璃正？ その権藤という人間は何かあるのか？」

「いえ……ただ、魔術の素養もなく、師事したこともない人間という申告でしたのでその通りに書き記しておりましたが、素人考えでも少し疑問点があります」

「どういうことだ？」

「はい。考えてもみて下さい。聖杯が何も魔を操る術を持たぬ人間を選ぶのでしょうか？」

「ふむ……」

幹継は少し考えるような素振りを見せていたが、やがて考えるのを

止めた。

「例えどのような人間でもこの遠坂の敵ではないさ」

そう言うのと両手を大仰に開く。

その余裕こそが遠坂家の家訓であるらしいが、その余裕が足を引っ張らなければいいのだが……

「時に、璃正。霊器盤に何か反応は無いのか？」

霊器盤とは専任司祭に与えられる英霊のクラスを判別する測定器のようなものである。

これにかかれば、マスターは判別出来ずとも既に現界しているサーヴァントは分かるはずである。

「そうですね……今現界しているのは……」

そこで璃正の言葉が止まる。

それを不審に思ったのか幹継も霊器盤を覗いてみた。

すると、二つの光が所々重なっている様子が見えている。

「これはどういうことだ…璃正？」

「どうやら…器械の故障かもしれません。しかし、この反応はバーサーカーで間違いないかと……」

璃正にしては珍しく歯切れの悪い回答だ。幹継は旧友の珍しい反応に目を丸くしていた。

「しかし…バーサーカーか」

どの程度の英霊を狂化させたかによるが分からないが、マスター次第では非常に厄介だ。

「まあ、全てはこの遠坂の前に跪くのだからな」

教会の中に幹継の笑い声が響いていた。

——350…45…40

「いよいよか……」

アインツベルン城の片隅で彼女はそう呟いた。

魔術師達がこの冬木の街に集まってきているのを感じる。

今晚にでも七人のマスターとサーヴァントが集まって聖杯戦争が始まるのであろう。

彼女、ケルベスフィール・フォン・アインツベルンは、失敗作である。

体に欠損はなく、むしろ作られたと聞けば納得してしまうような容姿に赤い目が印象的な彼女は重ねて言

うが失敗作である。

全く、失敗作と言われた身にもなって欲しいのだが。

恐らくアインツベルンからしたら、せっかく作ったのだから勿体ない。程度の考えで私をマスターに指名したのだろう。

失敗作というのも、あの人達からしたら失敗なのであって、当人としてはなんら不自由もない。

私には感情があったのだった。

本来アインツベルンは聖杯戦争を行うマスターに感情など不要。

と考えているらしく第三次聖杯戦争のマスターはロボットのように感情を無くし魔術回路を詰めこむという試みのもと造られたらしい。

らしいというのはケルベはそう聞いていただけだからだ。

人間までとは言わないが、それなりの感情を持ち合わせており、泣いたり笑ったりすることが出来てしまう。

それを失敗だと決めつけたアハト翁などは一度たりともケルベに会おうとしなかった。

「全く酷いやつだよな。なんだっけその……」

「アインツベルン」

「そうそうアインツなんとかって奴ら。作るだけ作って失敗したらポイかよ」

暗闇から男の相槌が聞こえる。

「まあ、アインツベルンってのはそういう家系だからしょうがないわよ」

ケルベは半ば分かっているような諦めたような心情を吐露する。

「俺のマスターにしては随分とまあ湿気てるなあ……」

お前もそう思うだろ？と何かを叩いているようだがケルベからは何も判別がつかなかった。

「それで私はあなたをなんて呼べばいいのかしら？」

「そうだな……」

暗闇の中の彼は考えているようだった。

「シンプルに復讐者へアヴェンジャーでいいんじゃないか？」

「そう、ならアヴェンジャー。聖杯でも取ってアインツベルンの連中でも見返しますか」

そう言ってケルベは身近にあった本を一冊取ると宙に投げる。

突如としてケルベの髪がふわりと揺れる。

暗闇から光が二つチカツチカツと見えた。

次の瞬間分厚いハードカバーの本が真っ二つになりそれぞれが壁に突き刺さった。

本に刺さっていたナイフは二つが二つとも禍々しい形をしていた。

第三次聖杯戦争開幕――？

彼女が本を投げたのと同時刻に権藤統二は砂浜の上にいた。

「なるほど。全ては神のお告げか」

儀式とやらに必要なものはとりあえず調達しておいた。

あとは夢で見た通りのことを行えば問題はないだろう。

「あー。閉じよへみたせ」。閉じよへみたせ。閉じよへみたせ。
閉じよへみたせ。閉じよへみた

せ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバインオーグ。降り立つ風には壁を――」

遡ること三十分前。

間桐已苑は間桐家の蟲蔵で召喚の魔法陣を準備している途中だった。

「相変わらず、汚い場所だな」

こんな機会さえなければ二度と入りたくない。

それに臓硯と一緒にいるのが更に已苑を不快にさせた。

「術の詠唱もなにもかも問題ない。だから出ていってくれないか？」

巳苑が悪意を込めた視線を臓硯に送るが、本人はどこ吹く風のようにカラカラと嗤った。

「冗談を言うな巳苑。こんな面白いもの滅多見れるものではないのだぞ」

そう言ってどこかに行く様子も見えなかったので、巳苑は深くため息を吐いて儀式に集中することにした。

「――」

彼女は願う英霊に聖杯に、この御身に流れる血の根絶を。

「まったくこんなぎりぎりに私達の住まいが出来るなんて私達ずいぶん災難ですわね。姉さん」

「そうね。あなたが私のセンスを疑うから余計に時間がかかってしまったわ」

「そうなんですよね。まさか姉さんが私のセンスを理解してくださいらないから驚いてしまいました」

かの双子も冬木の街にいた。

彼女達は他のマスターの候補達よりも先にこの街で拠点となる住処を作っていた。

名前は『双子館』

その名が示す通り屋敷に左右対称に二つ家が繋がっているカタチである。

見た目こそ同じだが、お互いがお互いのセンスを受け入れられないために内装は完全別物である。

「さて、そろそろ私、サーヴァントを呼び出さなければならないのだけれど？」

「妹。それは私の役目よ？なんて言っちゃって当主はこの私のみなのだから」

「可哀想に。未熟な自分の論理の中でしか生きることが出来ないみたいね。ならこうしましょう。二人で儀式を行いましょう」

「二人で？」

儀式を行えるほど魔力が溜まっている場所はこの館には一つしか存在しなかった。

新に探すほど悠長なことは言ってられない。

「はい。もしかしたら違うクラスのサーヴァントが同時に現れるかもしれませんよ？」

「そうしたらいきなりあなたを殺せるのね？妹」

「はい。私が姉さんを殺すことが出来ます」

笑みを崩すことのない彼女達は二人して双子館のメインホールに現れた。

「――」

二人はゆっくりと詠唱を始める。

何を望む？

全てを。

英霊に。

聖杯を手に入れるため。

「――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ――」

巳苑の中の蟲が珍しく活発に術者の体の中を這いずる。

滅多に消費しない量の魔力を消費しているからであろう。

しかし、今の巳苑にはその痛みすらも快感に感じられた。

「――誓いを此処ここに。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷しく者――」

巳苑は途中で妹の顔を浮かべる。

もうすぐ終わるから妹には全うな道を生きてもらいたい。

それだけが悲願だった。

物事には犠牲がつきものだ。

6人のマスターとサーヴァントの命で足りなければ自らも差し出そう。

メイルの詠唱も最終段階に入っていた。

聖遺物はこの戦争の命題である聖杯である。

聖杯の名前を冠すほどの英霊はそういない。

いずれにしても『彼』を召喚出来れば勝てないわけがない。

メイルはそう踏んでいた。

「――汝三大の言霊を纏まとう七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」

最後の一節まで言い切るとメイルはようやく一息ついた。

全ての詠唱は終わった。

後は聖杯の仕事だ。

彼らの願いは無事英霊と呼ばれる者達に通じ、各々の魔法陣の中には人影が現れる。

遙か時代を超え、数百年、数千年あるいはこの世ではない世界から招かれた存在。

魔法陣が時々雷を帯びてバチツと白く光る。

辺りに民家があったらボヤ騒ぎと通報されるくらいの煙だった。

その現象の一つ一つが召喚された英霊の凄まじさを物語っている。

そして、あまねく場所で召喚されたサーヴァントという名の英霊達は一様に自分の眼前にいる人間に問う。

「問おう、
汝が私のマスターか？」

開幕―？（前書き）

少しでも目を通してくれる方々がいて下さるので嬉しい限りです。

開幕――？

「あはは」

メイルは誰に向けてでもなく笑った。

どうやら召喚は委細なく成功したらしい。

「問う。あんたは俺のマスターか？」

魔法陣の中には赤い鎧に身を包んだ騎士がいた。

女性の中でも平均的な身長の子を出ないメイルはその騎士を見上げる形になる。

やはり英霊、とりわけ聖杯を依代とただけあって対峙しているだけでビリビリと何かを感じた。

「ええ、私はアメジスト・メイル。あなたのマスターよ」

メイルがそう言うと、赤い騎士はなるほど。と頷いた。

マスターが目の前にいる人物だと分かり、少し気を抜いたのだろうか。

感じるプレッシャーみたいなものが幾分か和らいだ。

「いや、まさか聖杯戦争って戦争があるなんてね。随分と豪気な名前をつけたものだよ」

赤の騎士は自分の言葉に納得するように頷く。

どうも、メールが抱いていた人物像と少しかけ離れていた。

そこで不安になったメールは赤の騎士に問うた。

「あなたの名前は――ね？」

すると、赤の騎士はおう。と頷く。

「いかにも、俺は聖杯の騎士と呼ばれている。この度の戦ではランサーのクラスで現界している」

「あなたランサーなの？」

「そうだな。きっと俺よりも相応しい奴がいたんだろうさ」

なんせ世界は広いからね。とランサーは肩を竦めた。

メールは契約したマスターとしてランサーのパラメータを眺める。

普通。と言っては悪いが、聖杯を依代として現界したのならもう少しパラメータが高くていいだろう。

それこそ特例で全てのパラメータがAになってもいい位なのにとメールは毒気づく。

「まあまあ、相手さんだって伊達に神話に生きてたりしないんだから、流石にそこは補正かからなかった

んでしょうよ」

全く随分気楽なランサーである。

それにしても幸運Aというのはランサーにしては珍しい気がする。

ランサーは三騎士として数えられ、抗魔力などのスキルが付与されるが、どうにも不運と呼ばれ過去二回の聖杯戦争においても例外なく幸運はEランクだったはずだ。

「まあ、運も大事な要素よね」

もしかしたら、EのスキルをAまで変えたことが聖杯なりの精一杯の加護だったのかもしれない。

「とりあえず帰ろうかしら。ランサー霊体化して付いてきて」

あいよ。とランサーは軽い返事をする、スウッと自らの肉体を霊体に変えて姿を消した。

メールが構えた本陣は召喚した場所からそう離れていない郊外にあった。

魔術的には不利かもしれないが、日本に興味があったメールはその不利を飲みこんでまでこの日本的な家屋にしたのだ。

「ほう。意外に日本的な所に住んでいるのな」

「そうよ。丁度空き家になってたみたいだから勝手に使わせてもら

うことにしたの」

そう言うのと、メイルは得意そうに薄い胸を張った。

「俺も欧州の方だから、こういう家屋は初めてだが、どうしてこの国の人間はここまであけっぴろげなんだ」

メイル達はその家屋の中を何かないか搜索していた。

部屋のほぼ全ては草で編まれた畳というものが敷かれており、木の匂いが心地よかった。

「まあ、マスター。なんかあったら知らせてくれ。俺はこの畳で寝てる」

「なっ……」

メイルは一瞬なんの冗談かと思ったが、ランサーは本当に実体化したまま畳に横になって寝息を立て始めた。

実体化するために必要な魔力もメイル自身が供給しているのになんて自由な。

と一瞬激情に駆られたが、自分はマスターなのだと言呟を見て思い出し、かろうじて溜飲を下げた。

「ふう」

一時間ほどこの屋敷を搜索してみたが特に収穫はなく、前の持ち主も暫く使っていなかったということしか分からなかった。

メールはとぼとぼとランサーの寝ている部屋の扉を開けた。

まだ、ランサーは寝ていた。

スースーと規則正しい寝息をたてている。

メールはそれがどうしようもなく我慢出来ずにランサーの体を蹴ろうと足を振りあげ――

「え？」

その振りあげた足はランサーの体に届くことはなかった。

気がつくともメールの体は宙を舞い一瞬の内にランサーによって地面に叩き伏せられていた。

メールの顔の真横にはいつの間に取り出したのか槍が刺さっていた。

「ん？ ああ、なんだマスターか」

ようやく目を覚ましたのかランサーは自分が組み倒した相手をようやく視認したらしい。

「いや、どうも寝ている時に敵意ってのを感じちまうとつい反射的にな」

悪い悪いとランサーはメールの上からどいた。

「な、なかなかやるじゃないランサー」

プライドが高いメールはびっくりして軽く漏れたなど口が裂けても
言えなかった。

開幕―?

――340…30…21

「よっと」

朝五時、統二は久々に漁を行っていた。

全く久々すぎてつい気合いが入ってしまう。

統二は釣りあげた魚を慣れた手つきで船の甲板に投げる。

船はこの街に来る時に乗ってきた物で、そこまで良い船ではないが、最低限のモノは揃っていたのでこうして海の方に出てみたのだ。

「流石だな」

「まあ、餓鬼の頃からやってるからな」

現在小舟に乗っているのは統二を含めて二人。

いや正確を期すならば、マスター一人とサーヴァント一人だった。

「しかし、触媒があんなものでこと足りるとはな」

一段落したので統二はサーヴァントの方を向く。

「ああ、あの木片は我が最高の船アルジェリアンの船体の一部だ。」

私にとってはそれをあんたが持っていたことが驚きだ」

統二の前の女性は頷く。

「これは水神殿に貰ったのだ」

「水神？ ああ、あんたの背中にけったいな刻印を彫り込んだやつか」
そうだ。と統二は答えた。

最初にこいつが召喚された時に思わずその目つきに圧倒された。

鷹のように鋭い目。

瘦身というのに相應しい体躯に統二に並ぶほどの背丈。

もしこの時代にいたら間違いなく惚れていただろう。と統二は少し場違いな考えを抱いた。

「この赤髭と呼ばれた海賊王を呼び出すとは、中々目が高い。この聖杯戦争の覇権は私達の手に収まったも同然だ」

「きつとそう言う奴ばかりが呼び出されてるんだろうな。えっと…」

「ハイレディン。呼びづらかったらライダーと呼んでもいい」

要は私が私と認識出来る名前前で呼んでくれれば全く問題ない。ライ

ダーはそう言った。

ライダーは話ながらも着々と甲板に増える魚をじっと見る。

「こう言っちゃ悪いが、あんたは漁師のままの方が良かったんじゃないか？」

その言葉に、ハハと、統二は苦笑する。

「全くそうは思うが、一度死んだ身だ。恩人に報いるのが日本人として筋じゃないか」

「いや、私は日本人じゃねえし、そういう美学っていうのか分からないがそういうのは持ち合わせじゃない」

「そうか、流石海賊王だな」

統二はそう言って笑うと、突然竿を仕舞い始めた。

「どうした？」

「なに。そろそろ取り過ぎだ。魚も生き物だが、海ってのも生き物だ。何事もほどがいいんだよ」

「あんたがその水神とやらの愛されてるのが分かったわ……」

そうか？と統二は手早く釣った魚を仕舞って冬木の街に戻った。

「これからどうする？手っ取り早くそこらの奴ら殺すか？」

ライダーはにこやかにそんなことを言う。

馬鹿を言うな。と統二がそれを窘めた。

「こういう闘いは先に自分の能力がバレた奴が負けていくんだよ。特にアンタなんて前に出たら一発でバレルだろうが」

統二の意見が意外と的を得ていたようで、ライダーは、なるほど、そういうことか…と納得したように頷いた。

「しかしだな……機を見つければすぐに攻める」

要は漁と同じだ。

統二はそう言って空を見上げる。

これから起きる戦争のことなど知らないというような青空であった。

「そーいやさ、アンタって何か聖杯に願うことってあるのかい？」

統二の問いにライダーは勿論と答えた。

「当たり前だ。じゃなきゃあんたなんか召喚ってか呼びだされる義理はない。私の望みはね、全世界に――」

「なるほど全世界の海を支配すると」

「まだ言っていないんだが？」

「違うのか？」

変わらないさとライダーは口を尖らせて言う。

「俺は、その願いこそが俺とアンタを引き寄せたと考えている。俺の願いも似たようなものだ」

なに？ライダーはそれを聞くと途端に興味が湧いたのか統二に向かって好奇の視線を投げかける。

「ほう。ならば、二人でこの戦いが終わった後、侵略戦争でもけしかけるか？」

「そうだな。そこまで出来たら上等だな」

統二は浅瀬になってきたので船から降り、自らの手で船を押す。

「……あのさあ」

「なんだライダー」

「ここって、もし狙撃されるなら一番されやすいよな。とか思った」

その言葉に統二はぎょつとして辺りを見回す。

迂闊だった。

もう自分はそういう世界にいるのだという認識がまだなかった。

もし、今狙撃されていたら、なんの願いも果たすこともなく幕を閉じる場所であつた。

「ライダー。恩に着る」

「なに。さっきからスコープ越しに誰かに見られている気配がしてね」

そう言うライダーはある一点を見つめる。

釣られて続二もそちらを見るが、特に何かを視認出来たというわけではなかった。

「気配が消えたか……。逃げられたな」

まあ、いい。とライダーは浜辺に腰を下ろす。

「すぐに事は起こる。気長に待つとしようか」

そう言うのと、ライダーは砂浜に寝転び空を見つめた。

開幕――？

――339..40..32

「チッ」

ガブリイル・アダモフは地面に向かって唾を吐く。

油断していた。

流石は英霊と言ったところか。

かなり離れていた距離から見ているはずなのに気付かれた。

マスターの方には全く気付かれていなかったのだからこれは早々に決まるかと思ったがどうも上手くないものだ。

「まあ、簡単に決まってしまうてはそれはそれでも悲しいものだな」

アダモフはポケットからドロップを取り出し口に含むとガリガリと噛み砕きながら食べた。

アダモフの風貌はこの時期の冬木においてはそれなりに目を惹くのだろう。

たまにすれ違う人々の視線を感じる。

しかし、アダモフはその視線を一切気にすることなく歩き続ける。

「全ては、ツアーリの勝利の為だ……」

誰に言うのでもなくそう呟くと、アダモフは古びた家屋の中に足を踏み入れた。

中も外と変わらず最低限の生活を過ごす程度の機能しか持っていないようだ。

「ツアーリ。やはりこの闘い一筋縄ではいかないようです」

アダモフが恭しく頭を下げたその先には大柄な男性がいた。

正確にはツアーリだったという表現が正しい。

彼は、自分で作ったのかこの古ぼけた家屋にそぐわぬ豪華な椅子に座ってアダモフを見下ろしていた。

「そうかそうか。分かった。御苦労だった」

彼はおもむろに椅子を離れると外を見るように窓に目をやった。

「この冬木という地まだ見知らぬ土地ではあるが、どうにも持っている魔力が他の街に比べて幾分か高いようだ。これなら工房を2，3個作ることも造作ない」

クククと笑いを囁み殺したような声を上げた。

「しかし、ツアーリがキャスターのようなクラスで召喚されるとは

思ってもみなかったです」

アダモフがそう言うのと、キャスターは口を歪めた。

「どうにも、他のクラスも埋まっておったし、一応僕は一時期魔術の類に興味を持ったことがあってな」

あれは余りにも短い期間だったから史実を読んでも出てこないだろうな。とキャスターは答えた。

「それは、我が先祖代々に伝わる書物に書かれておりました。『我がツァーリー―イヴァン4世は死刑にした人間の体を使って新しい人間を精製する術などを一部に人間に研究させ、自ら使用してオプリーチ二ナに活用したと』」

アダモフの言葉を聞くとキャスターは物凄く愉快そうにハハハと声を出して笑った。

「そうか。アダモフ。貴様は僕の部下であったアイツの子孫にあたるのか。言われてみればなるほど確かに目つきと体つきは似ているな」

恐縮です。とアダモフは頭を下げた。

「しかし、ツァーリ。時代は進化しました。私はあなたの傍にいた時の我が先祖よりも格段に強くなりました」

そう言うときアダモフは肩にかけている銃をキャスターに見せる。

「ほう……儂の時代に比べて格段に性能が上がってそうだな」

関心したようにキャスターは銃を眺めた。

「これさえあれば、ツアーリの手を煩わせることすらありません」

「ふむ……」

キャスターは何かを考えるように顎に手を置いていたが、やがてアダモフを見据えた。

「アダモフよ。貴様はマスターだけ狙え」

「と仰いますと？」

「ふむ。まず第一にこれは貴様も知っているだろうが、儂らサーヴァントは大抵の攻撃は効かぬ。それに当たったとしても大した効果は得られない。それに比べてマスターはただの人間。銃弾一発で仕留められる」

「なるほど……」

「第二に、といっても、これが主たる理由なのだが……。お前が倒してしまつては儂が殺せないじゃないか」

キャスターは豪快に笑うと霊体化して姿を消した。

開幕――？

―320..00..53

「ふう……」

幹継は召喚が成功したことに安堵してため息を吐いた。

結果は上々だ。

あのレベルの英霊を呼べるマスターなど他にはいないだろう。

召喚した幹継でさえ狡いと呼べる位に強力なのである。

これなら、妻と子も家に置いておいても構わなかったかもしれない。

「アーチャー」

幹継がそう呼ぶと、突然幹継の眼前に巨躯が現れた。

おおよそ人間と呼ぶには大きすぎる、実在した人物とは到底思えない。

さながら、お伽話に出てくるような巨人であった。

「いかながなされたかマスター」

その巨人は恭しく頭を垂れる。

普通の人間であればこれほどの巨人を意のままという事実だけで昂

ぶっってしまうだろう。

しかし、遠坂幹継という男は眉根一つ動かさなかった。

幹継は仮にどのような英霊であれ、マスターとサーヴァントなのであり特別な感情を抱く必要もないと感じていた。

「この屋敷の周辺に不審な奴はいたのか？」

「委細な……」

く。とアーチャーが呟こうとした瞬間に屋敷全体が大きく揺れた。

「ふむ。何者かが早速訪れたようだな」

出るぞアーチャー。そう言うのと幹継は庭先を見に行くような様子で椅子を立つ。

「宝石及びその他の準備は十全だ。この遠坂の敷地内で戦うことを後悔するがいい」

幹継が庭先に出ると、そこには黒い何かがあった。

アーチャーに比べれば小人のような体躯である。

顔まで伺い知ることは出来ないがゆらゆらと揺れ、腕が体の割に長い印象を受けた。

「マスターあれはいかほどのサーヴァントでしょうか？」

アーチャーは実体化すると、隣にいた幹継に問う。

「ふむ……そこまで強くなさそうだ」

一応能力を読んだが幹継にはどうにもこのアーチャーが負けるほどの能力はないと感じた。

「アーチャー。私は後ろでマスターからの攻撃に備える。お前はサーヴァントとして戦え」

幹継は一步下がると辺りに気を配り始めた。

敵対するサーヴァントは恐らくバーサーカー。

霊器盤のエラーを引き起こした存在で間違いないだろう。

それもアインツベルンか間桐のどちらかのサーヴァントに違いない。

これは幹継の勘ではあるがこの早い時期に攻めてくるマスターは間違いなく冬木の地理に詳しいはずだからである。

幹継は辺りに気を配りながらも、目の前で起きている闘いからも目を離さなかった。

「ふっ！」

アーチャーにしては珍しく剣のようなものでバーサーカーに襲いかかる。

ような物というのは明確な形容が難しいのだ。

剣だと思ったら、別の何かに変化する。

とにかく掴みどころのない得物だ。

幹継は自分のサーヴァントの宝具の特異性を見て驚く。

向こうは武器の様なものを持っている気配はない。

「最高の展開はこのまま決着か…」

ここで決まってしまうか。そうであれば随分と呆気ない幕引きだ。

勿論幹継も言葉には出しているがそんなことは微塵も思っていないかった。

「――ッ!!」

アーチャーの得物は手ごたえを感じることはなかった。

避けられた。

逃がした敵の気配を探ろうと辺りに意識を張り巡らせる。

しかし、意識を張り巡らせる必要もなかったのだ。

いる。

先ほどの場所に敵は間違いなくいた。

同じように揺れている。

不穏な空気を感じたアーチャーは剣を矢に変えてソレを打つ。

放たれた矢は寸分違うことなく突き刺さる。

そのはずだった。

「む？」

確かにゆらゆらと揺れていた敵サーヴァントは消えた。

気配も感じられない。

「やったのかアーチャー？」

幹継からの問いにアーチャーは判然としないような表情で恐らくと答える。

「マスターが言うように奴がバーサーカーでしたら間違いなく殺すことが出来ました」

「随分と奥歯にものが引っかかる言い方だな」

「僭越ながら。マスターも不思議に思いませんか？バーサーカーにしてはこちらに攻撃を加えることもなくただ立っているということなど」

ふむ。顎に手を当てながら幹継は思案する。

「確かに、一理あるな。まあ今夜は侵入者を撃退出来たのだからそれで良しとしようじゃないか」

アーチャー、外の監視を頼むと言い残すと、幹継は屋敷の中に入っていた。

開幕―？（後書き）

整合性と、面白さの両立目指して頑張ります。

開幕―？（前書き）

少しでも面白いと思っていただけるように頑張ります。

開幕――？

――319..55..35

アーチャーが追ってくる気配がない。

どうやら逃げられたようだ。

逃げられた。というより興味がなくなったという方が正しいのか。

いや、どちらも正しくないのかもしれない。

「マスター。これでよろしいのですか？」

先ほど遠坂邸から逃げ帰ってきたサーヴァントはマスターに問うた。

マスターはコクリと頷いた。

「しかし、あの大きさといい武器の多様さといいなんなのかしらね
……」

マスターは呆れたようにため息をついた。

そして、自らのサーヴァントをに憐憫の視線を送る。

自らの運の悪さを呪うかのように。

「失礼ですがマスター。私はそこまで頼りないでしょうか？」

サーヴァントの問いにそのマスターはあっさりと頷く。

「だってそうじゃない？アサシンなんて諜報が主な役割じゃないのかしら？私自体も戦闘向きとは言えないもの……」

要は同族嫌悪って奴ね。気にしないで。とマスターである間桐已苑は笑う。

已苑はアサシンにこともあろうか諜報ではなく、遠坂邸のサーヴァントの撃破を命じていた。

アサシン自身その要求にはいささか疑問を感じていた。

もしかしたら、マスターはサーヴァントの特性を理解していないのではないのかと勘ぐったほどだ。

しかし、マスターの命令である以上アサシンは少し気乗りしなかったが仕方なく遠坂邸に赴いたのだった。

そこには奇妙な光景が広がっていたのだ。

誰か他のナニかがアーチャーと対峙している。

アサシンはそのナニかを凝視する。

もし敵対するサーヴァントだったならばここで殺してしまえば今後楽になると考えていた。

しかし、どうにもおかしいことにアサシンは気づく。

魔力の流れは感じるがどうにもサーヴァントと言うには語弊がある気がしていた。

かと言ってただの魔術師、いやどこかのマスターだとしてもよりによって敵のサーヴァントの前にみすみす立つなんて馬鹿な真似をするわけがない。

「マスター実は……」

「どうしたのかしら？もしかして、奇妙な人型でも見たのかしら？」

「……！！どうしてそれを？」

アサシンの質問に対して巳苑は少し笑うと右腕を自らの眼前に突き出した。

「その人型ってこんな奴じゃなかったかしら？」

そう言うのと巳苑の周囲からどこから湧いてきたのか分からないほどの蟲が現れて一つの人型を作る。

アサシンは呆気にとられていた。

先ほど見たのと寸分違わないモノがそこにはあった。

こうして屋敷で見ると、明るさからか、目を凝らして見れば顔は無いので人間ではないと判別すること
は出来る。

後ろ姿で判別するのは難しいだろう。背格好なんて巳苑にそっくりだ。

暗闇の中では尚更だ。

なるほど、アサシンはようやく合点がいった。

先程アサシンが話してもいないのにアーチャーの容姿や、武器について知っていたことについて不思議に感じていたのだ。

使い魔を送っているならまだしもそのような気配も感じることもなくあの遠坂邸周辺にはアサシンしかいなかった。

そう疑問に思っていたのだが使い魔として自分の分身を放っていたのだった。

「驚いた？アサシン。これでも私だって魔術師の端くれよ。それもある人形師から受け継いだ技術と間桐の跡継ぎとして蟲の魔術。その二つを活かせばこんなことだって出来るのよ？」

そう言っただけで巳苑がもう一度右腕をかざすと、巳苑の形をしていた人型は姿を変えあたかもアサシンのような体躯になった。

「一応。動かすことも出来るし戦うことも出来るんだけど、そういうことのために使う気はないわね」

巳苑は、もう飽きたのかパツと手を振ると蟲達は人型を崩してどこかに消えた。

気づくとアサシンと巳苑の周りには蟲など一匹もいなかった。

あれだけの蟲が部屋にいたとなると考えると少し不気味だ。

アサシンは柄にもなく寒気を感じた。

「さて、アサシン。ここで私達の戦略を確認しておきましょうか」

「戦略ですか？」

そう。戦略と巳苑は頷く。

「アサシン。あなたの宝具って射程は広いのかしら？」

「いえ……恐らく相手に触れないと発動しないですね」

「なるほど、必殺の宝具ともなると条件が厳しいのかしらね。まあいいわ。アサシン。とりあえずあなたはさっきの人型と一緒に諜報活動。一応私も見てるから無茶はさせないと思うけれど、殺せると判断した場合は任せるわ」

「了解しました。マスター」

「期待してるわよ？ 是が非でも聖杯は私達がいただくわよ」

アサシンは今一度頷くと姿を消す。

「自らのサーヴァント位は信じてあげようかしらね……」

アサシンが消えた部屋で巳苑はそう呟く。

巳苑は幼い頃からの調教のせいで人というか他人を信じることが得意ではなかった。

他人の善意は悪意。

忠告は甘言。

そう生きていくしかなかった。

信じることが出来たのは妹とあの人形師だけだ。

サーヴァントなどと言われているが、アサシンは英霊に数えられる存在である。

英霊とは言わば人間より上の存在と考えてもいいのかもしれない。

そういうモノが間桐巳苑という場末の魔術師に服従するのか。

「まあ、私の得た教訓では物事はそう上手く運ぶはずはないんだけど……」

巳苑は自らの令呪を見る。

大丈夫だ。

例え偽りの共闘関係でも構わない。

本当である必要なんてどこにもない。

願いが叶うならなんでもいい。

この戦争が終わるその日まで。

開幕ー？（後書き）

今日買ったoath sign聞いてますがいいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3951y/>

fatexx3 第三次聖杯戦争

2011年11月23日14時53分発行